HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	長谷観音異国霊験譚の意義
著者	追塩，千尋；OISHIO，Chihiro
引用	年報新人文学(10)：8-37
発行日	2013-12-20

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

［論文］

長谷観音異国霊験譚の意義

追塩　千尋

はじめに

かって柴田実氏は、日本における仏菩薩への信仰は釈迦や薬師一般に対してではなく、善光寺如来とか長谷寺観音といった特定の本尊に対する帰依であること、それは神について語られる示現の縁起や功徳の物語と極めて相類似する、とされた(1)。そうした仏菩薩を佐藤弘夫氏は、すべての衆生に平等の恩恵をもたらす形而上的・普遍的な仏とは区別されるべき形而下的地域神としての〈日本の仏〉とし、〈日本の仏〉は神と同レベルながらも神はそれより一ランク下、と位置付けた(2)。

柴田・佐藤両氏の指摘を筆者なりに表現するなら、日本の仏菩薩は普遍的仏菩薩を本地とした「垂迹

仏」ともいうべき存在である、といえよう。

筆者は近年、説話集に現れた神々についてその機能面を中心に検討してきた(3)。その中で神の特質として、垂迹神ではあっても本地の仏菩薩の機能をそのまま継承するわけではなく、特に異国においてはその機能を及ぼし得ないという限界を有することを指摘した。こうした中で長谷寺の本尊である十一面観音は日本の神とは異なるものの、中国・朝鮮という異国にその霊験を及ぼした話がその霊験譚を集めた『長谷寺験記』(以下『験記』)(4)に五話語られている。すなわち、入唐した吉備真備が難題を切り抜けたこと(上巻第一話)、唐朝の馬頭夫人が端正な容貌を得たこと(上巻第六話)、梁の太祖が天子の位を得たこと(上巻第九話)、新羅の照明王の后が王難を逃れたこと(上巻第十二話)、唐の堯恵禅師が往生したこと(上巻第十三話)の五話で、以上の霊験は皆長谷観音によるものとされている。

長谷観音が異国において霊験を示し得たのは、菩薩であることから生じるその普遍性故、といえるのであろう。そうした機能を示し得た点で、佐藤氏の言うように長谷観音は神とは同レベルながらも神よりランクが上、ということになろう。そうであれば、長谷観音以外の日本の仏が異国で霊験を示した話がもっとあってもよさそうであるが、管見では目にしない。そうした点で長谷観音は極めて特異な仏といえるのである。

長谷寺の霊験譚に見られる海外志向傾向については研究者も注目しており、野口博久氏はその成立の問題を取り上げている(5)。ただ、霊験譚の本格的分析は管見では池上洵一氏を除いてはなされていないようである(6)。ただ、池上氏が考察の対象とした説話は五話中の一話(上巻第六話)のみで、その分析視点も説話の構造論に向けられていた。したがって、本稿のように、神の機能の視点からの分析な

どは行う余地はまだ残されているといえよう。本稿は長谷観音を例に地域神化した仏菩薩の異国霊験譚を素材に、形而上的仏菩薩と神との中間に位置するとされる形而下的仏の特質を考えることを課題としたい。

長谷寺・長谷観音に関する研究は枚挙に暇なく、ここで振り返る余裕はない。ただ、基本文献として永島福太郎『豊山前史』（一九六三年、総本山長谷寺）、川田聖見・永井義憲『長谷寺編年資料』『長谷寺文献資料』（共に一九七五年、総本山長谷寺）、逵日出典『長谷寺史の研究』（一九七九年、巌南堂書店）、林亮勝・坂本正仁『長谷寺略史』（一九九三年、真言宗豊山宗務所）などは欠かせないであろう。なお、簡単な注が付された横田隆志『現代語訳長谷寺験記』（二〇一〇年、総本山長谷寺）は『験記』を理解する上での良い手引き書である。総本山長谷寺は寺史に関する学術的出版を積極的に行っている寺院であるが、それらの書が一般に出回らないのが惜しまれる。

また、長谷寺研究の近年までの到達点を参考文献も含めて知る上で有益なものとして、神戸大学文学部国語国文学会『国文論叢』三十六号「特集　長谷寺研究」（二〇〇六年七月）所収の諸論考(7)、中でも横田隆志他「中世長谷寺キーワード小辞典」をあげておきたい。

一、長谷寺の霊験寺院化

（一）霊験寺院化の過程

日本における仏菩薩は柴田氏の指摘どおり、特定の本尊に対する帰依であり、抽象的・普遍的仏菩薩が帰依の対象とはなってはいない。そのことは日本最初の仏教説話集である『日本霊異記』[8]や、その後の『今昔物語集』（以下『今昔』）や『沙石集』[9]などを見ても確認し得ることである。ただ、特定寺院の本尊としての功徳が語られたとしても、それらの寺院がすべて霊験寺院として広く貴賤の信仰を集めるようになっていくわけではない。そうした点で長谷寺は、早くから霊験寺院化していたことが確かな史料で確認し得る寺院の一つなのである。既に良く知られたことではあるが、初めにその霊験化の過程を確認の意味で追ってみたい。

長谷寺に関する縁起類は、『験記』を初めとして撰者が菅原道真に仮託された『長谷寺縁起文』などが著名であるが、いずれも鎌倉期のものである。長谷寺創建を伝える確かな史料は無いが、現在のところ養老四年（七二〇）辺りが一つの画期とされている。もっとも、縁起類では八世紀以前に淵源を持つことも説かれるが、そこで語られる史実とされている事象は参考程度にしか扱えない。そうした点では長谷寺のことが見られる確かな史料の最初は、神護景雲二年（七六八）に称徳天皇が長谷寺に行幸し八町の田を寄進したという『続日本紀』の記述であろう[10]。その後「霊験」ということに着目するなら、承和十四年（八四七）に長谷寺は壺坂寺とともに定額寺になるが、その理由が「元来霊験之蘭若也」とされている[11]。公的史料に「霊験」たることが述べられている最古のものである。長谷寺の本尊が霊験あらたかであることは貞観十八年（八七六）の長朗の申牒[12]で述べられ、霊験寺院としての長谷寺は九世紀においては自他共に広く認知されていた。

ただ、その霊験の中身については明確に記されることはなく、災疫防止や[13]、清和上皇の病気平癒

祈願などが期待されたこと[14]が知られる程度である。そうした中で、『日本霊異記』下巻第三話は具体的な霊験の内容が知られる確かな部類の史料といえよう。話の概要は、天平宝字年中（七五七～七六四）に船親王（天武天皇孫）は初瀬の上の山寺（長谷寺）に参り法会を設けた。その時借銭返済に困って観音へ救済を求めていた大安寺僧である弁宗の訴願を聞き、親王は代わりにその借銭の返済をした、ということである。弁宗は観音の利益により借金の肩代わりをしてもらったという話といえる。この話の事実の有無は確定できないにしても、船王が親王になったのが天平宝字三年（七五九）であること（『続日本紀』同年六月十六日条）、かつ平安初期成立が明確である『日本霊異記』という書に掲載されている点で、八世紀半ばから九世紀初頭にかけての長谷観音の具体的霊験が知られる貴重な話といえよう。

以上のことから、長谷寺は創建後ほどなくして霊験寺院化していき、本尊である観音の具体的な霊験も語られていたことが確認できよう。

その霊験の評判が異国にまで及んでいたことが主張され始めたことが確認出来る時期が、十世紀末である。その初見が『三宝絵』（九八四年成立）下巻五月「長谷菩薩戒」の記述で、そこでは長谷寺建立以後「利益アマネク、霊験モロコシニサヘキコヘタリ」とされている。続いて『源氏物語』（十一世紀初頭頃）「玉かづら」にも、「仏の御中には長谷なむ、日の本の中にはあらたなる験あらはし給ふと、唐土にだに聞えあんなり」と記される。すなわち、十世紀末から十一世紀にかけて長谷観音の霊験の評判が唐土にまで及んでいたことが主張されていたことが知られるが、実際の機能面は語られてはいない。

異国において長谷観音の霊験が評判になっていた段階から具体的に霊験を示したことが語られ始める時期は、もう一世紀ほど後の十一世紀末から十二世紀初頭辺りである。その一つが『江談抄』巻三の一「吉

備入唐の間の事」で、この話は『験記』上巻第一話の先行説話とされている。霊験部分は、真備が唐において文字が見えずかつ暗号のような野馬台詩を読むことを迫られ、住吉明神・長谷観音に祈ったところ文字が見えかつ蜘蛛の糸に導かれ無事読むことができた、という話である。ただ、真備がこの難題を切り抜け得たのは、住吉・長谷観音いずれの働きによるものかは『江談抄』においては明確ではない。

もう一つは『今昔』である。その巻十一―三十一話は徳道による長谷寺建立譚であるが、その結びのところで「凡ソ、此朝ニシモ非ズ、震旦ノ国マデ霊験ヲ施シ給フ観音ニ御マス」とされる。さらに巻十六―十九話は、『験記』上巻第十二話の先行説話で、新羅国王の后が被った王難を長谷観音が救うという話で、話の最後で「念ジ奉ル人、他国マデ其ノ利益ヲ不蒙ズト云フ事無シ」とされる。

後述のようにこれらの話は『験記』ほど詳細ではなく、かつ后が難を免れ得たのが本当に長谷観音によるものかどうか曖昧な点も残されている。しかしながら、十二世紀初頭においては異国における長谷観音の霊験の具体相が広まっていたことが知られるのである。

以上の二例においては、長谷観音の霊験は今一つ明確ではないにしても、十一世期以降には異国における長谷観音の具体的な霊験が宣伝されるようになっていたことは確認できよう。それが長谷寺だけの一方的自己主張ではなく、一般的に認知され一定程度国内に広まっていたことが重要である。そのようになっていく契機などについて、次に考えてみたい。

（二）焼失と再建をめぐる宣伝活動

貴賤の信仰を集めるために宣伝活動を行うことは、どこの寺院でも共通しているであろう。十世紀末

以降に長谷観音の異国霊験が主張されて行く一つの契機について、十世紀以降繰り返される本寺の焼失と再建活動との関係で述べてみたい。

長谷寺の焼失と再建の状況についても既に明らかにされているところであるので、ここではその確認に止めておきたい。焼失のことは十世紀の半ばから確認されそのたびに再建されたことが知られるが、『験記』成立以前に限るなら五回の焼失が知られる。『験記』上巻第十話は長谷寺の焼失をめぐる霊験譚であるが、そこで記される五回の火災は、天慶三年（九四四）、正暦二年（九九一）、万寿二年（一〇二五）、永承七年（一〇五二）、そして嘉保元年（一〇九四）である(15)。焼失の深刻度は、本尊の損傷の度合いに関係していたようである。第一回目は本尊は灰燼と帰し、第二回目は観音堂の正堂は焼けなかったものの礼堂は焼け、第三回目は正堂にまで火は及ぶが内陣は類焼を免れ、第四回目は本尊は焼けるが頂上仏のうち三面は焼け残り、第五回目は本尊は灰燼に帰すが頂上仏は残ったことが知られる。

これらの焼失の度に再建がなされるが、上島氏によると画期をなすのが第五回目である嘉保元年（一〇九四）の焼失とその再建であるとされる。氏が上げたいくつかの理由の中で注目すべきは、この度の再建に際して勧進活動が行われたということである(16)。それまでは朝廷の支援もあり円滑に再建が行われたが、この度は落慶供養まで四十年近くの歳月を要していることが勧進が軌道に乗るまでの困難を示しているともされる。

『験記』上巻に収められている「長谷寺律宗安養院過去帳」では、嘉保元年の焼失後に再建の勧進活動を行ったのは行仁聖人（一〇三一～一一二〇）で、彼はその時に「当寺の霊験建立の次第を継録して」白河院に提出したとある。行仁は当時長谷寺に所在した流記などに継録したと考えられ、それが現在は

散逸している『長谷寺流記』（以下『流記』）と呼ばれるものとされる。野口博久氏によると『験記』収録の五話の異国霊験譚のうち三話までが『流記』に依拠しているとされ、長谷寺の海外志向は『験記』以前の『流記』に濃厚に現れていた、とされる(17)。この『流記』の成立時期は明らかにし難いが、上島氏は『流記』は事実上は行仁新作ともされる(18)。そうであれば長谷寺の具体的な異国霊験譚は十一世紀末までには成立・整理されていたことになる。そして、再建のための勧進活動の中でそうした霊験譚が宣伝され、それらの話の一部が『江談抄』『今昔』などに取り入れられた、と考えられよう。

（三）新・今長谷寺の建立

地域神化した仏菩薩がその仏威を及ぼせる範囲は、長谷寺を例にするならその所在地である大和限定ではなく異国まで及ぶこととなった。その点が機能面において日本の神とは大いに異なるところであろう。神の神威が及ぶ範囲は原則その祭祀圏内で、それを越える場合は日本国内に限られ、かつ神自身が自ら赴いたり随行する（あるいは神輿などに乗せ随行させる）か、勧請という方法によらねばならなかった。特に後者の勧請は宇佐八幡が石清水八幡として勧請されたことなどに見られるように、身近に利益を得たい場合にとられた方法であった。

仏菩薩に関しても長谷寺を初めとして清水寺や善光寺などに典型的なように、全国に「新・今〜寺」などと総称される同名寺院が創建されていった。こうした現象は各寺の宣伝活動や勧進僧などによる教線拡大の結果、という捉え方が可能であろう。神が勧請される前提は一定程度神威や知名度が上がった場合であるのに対し、仏菩薩の場合はその霊験を広めるための勧進聖などによる宣伝活動の結果、とい

う違いがある。また、寺院と神社ではその数において後者の方が圧倒していることも違いの一つといえる。

仏菩薩本来の機能からすれば、こうした勧請に相当する行為は必要なかったはずである。にもかかわらず神の勧請と同様に盛んに行われたということは、地域神として受容されていた日本の仏菩薩が有した一定の限界を示すものともいえよう。

そうしたことを踏まえて「新・今〜寺」建立状況をうかがう際に、真言宗豊山派仏教青年会編による『大和長谷寺・全国長谷観音信仰』（二〇〇六年、真言宗豊山派宗務所）が便利である。これに先行するものとして、杉岡美佐子氏が作成した「全国長谷寺地名表」がある[19]。そこでは一〇五カ寺（長谷寺九十六ケ寺、新長谷寺七ケ寺、近長谷寺一ケ寺、長谷観音堂一ケ寺）の長谷寺（読みは「はせでら」「ちょうこくじ」「ながやじ」など）が列挙されている。それに対し『大和長谷寺・全国長谷観音信仰』には、赤星龍治氏による調査を基に二六九の関係寺社が掲載されており、「長谷寺」という名称寺院に限ると一一五ケ寺に上ることが知られる。各寺院の建立時期などの問題は伝承的なことに属するものが多いのでひとまずおくとして、地域的に多いのは本寺がある奈良で、関係寺院は四十三ケ寺に及ぶ。

こうした新・今長谷寺建立の時期に関して福原僚子氏は、長谷寺式十一面観音像が各地で製作されるのは十三世紀以降で、現存最古の例は安貞二年（一二二八）造立の伝香寺地蔵菩薩立像胎内納入十一面観音立像であること、ただそれに先行する十一世紀の作例があることを紹介し、十二世紀までに製作された大和長谷寺と関係がある十一面観音を中心とした立像を四十九例上げ、その地方展開の様子を述べている[20]。

新・今長谷寺建立時期は十二世紀以前に溯れそうであることが知られるが、上限は十一世紀あたりであろう。八田達男氏は長谷観音が錫杖を持つという特異な像容は、勧進による再興を行う必要から形成されたもので、その時期は嘉保元年の炎上以後であるとされる[21]。また、伊勢の近長谷寺は天暦七年（九三五）付の資財帳が存在するところから、最も早い新・近長谷寺の一寺院といえるが、それは勧進活動による伝播ではないことや、「近」の意味するところが課題でもあることなどを述べている[22]。氏の指摘から、長谷寺にとっては、改めて嘉保元年の焼失とその再興活動が行われる十一世紀末から十二世紀初頭が画期であることが確認されよう。

さて、ここまでの叙述を踏まえ改めて異国霊験譚の問題に戻るなら、十世紀前後に異国でもその霊験が評判になっていたことが主張され始め、十二世紀初頭までにはその霊験が実際に示されたことが具体的に語られていた。霊験の具体化がなされる契機として、特に嘉保元年の炎上以後の再建をめぐる勧進活動の中で広められていった可能性が推測されよう。ただ、その異国霊験が具体化される契機や背景に関して今少し補足しておきたいことがある。章を改めて考えてみたい。

二、異国霊験譚主張の背景

（一）異国霊験譚主張の時期的意義

異国霊験主張の直接の契機や必要性は嘉保元年の炎上以後の再建をめぐる勧進活動を円滑に進めるた

めから生じたことであったとしても、唐突に霊験譚が創作される訳ではないであろう。国内のみならず異国にも霊験を及ぼすことを主張することにより、長谷寺をクローズアップさせねばならなかった固有の事情や長谷寺の置かれていた環境などがあったからと思われる。その「固有」事情を探ることは極めて困難ではあるが、いくつかの可能性を述べてみたい。一つは他寺院との競合関係である。

正暦元年（九九〇）に長谷寺はそれまでの東大寺支配から興福寺（興福寺僧平伝）に押取され、以後興福寺の末寺となっていくとされている(23)。そのことを明確に示す史料は『東大寺要録』（巻六末寺章第九）であることもあり、興福寺による末寺化を批判する東大寺側の一方的主張ともいえるので額面どおり受け止めることに慎重であるべき、という意見もある(24)。ただ、ここで注目したいのは、その時の東大寺別当は奝然（九三八～一〇一六）であったことである。

周知のように奝然は別当になる以前の永観元年（九八三）に入宋し、帰国（九八六年）に際してインドの優塡王造立とされる釈迦像を模刻して将来した。それがいわゆる清涼寺式と呼ばれる三国伝来の生身釈迦像である。奝然は帰国後の永延元年（九八七）に将来した釈迦像を安置すべく清涼寺の建立を朝廷に奏請するが生前には実現せず、没年に弟子盛算による重奏により棲霞寺内の釈迦堂を清涼寺と号すことが許された(25)。長谷寺が興福寺の支配を受けるようになる時期は、東大寺側には以上のような動きがあったのである。長谷寺を支配下に置くに際して、異国からの将来像の功徳を広めようとしている東大寺別当らへの何らかの対応策を興福寺が打ち出す必要を感じていたことを推察するに難くない。

清涼寺の釈迦像は善光寺阿弥陀如来、因幡堂薬師如来とともに天竺・震旦・日本の三国伝来の三如来とされる。このうち、善光寺阿弥陀如来像は欽明天皇十三年（五五二）に百済から渡来し、寺の創建は

推古天皇十年（六〇二）に像が信濃に移された時とも（『扶桑略記』）、皇極天皇元年（六四二）の時ともされる（『善光寺縁起』）。しかしながら、善光寺は信濃地域においては早くから霊験寺院としての信仰を集めていたものと思われるが、確かな史料に善光寺が登場するのは意外に遅く源頼朝が関わる十二世紀末を待たねばならない[26]。すなわち、三国伝来の如来の一つである善光寺如来は地方寺院であったせいか、長谷寺が興福寺の末寺化の道をたどり始める十世紀末時点では、まだ中央の人々にはなじみがなかったといえる。

善光寺に対して因幡堂（平等寺）薬師はその縁起類（『因幡堂縁起』、『山城名跡志』巻二十一所引「因幡堂本尊伝」など）によると、薬師像は天竺・竜宮経由で日本に漂着し、天徳三年（九五九）に因幡国で霊験を示し、その後京都に移り長保五年（一〇〇三）に安置のための寺が創建されたとされる。因幡堂に関しても同時代資料に欠けるものの、中野玄三氏は、因幡堂縁起の成立は遅くとも平安後期で、その成立に際しては三国伝来という点で清涼寺釈迦縁起製作の風潮・刺激があったと推測している[27]。

善光寺はひとまず置くとして、長谷寺の近辺である京都では十世紀末から十一世紀初頭にかけて清涼寺・因幡堂の二寺院が三国伝来の如来を目玉とした宣伝活動が行われていた、といえるのである。こうした新参ともいえる異国仏の導入という動きに対して、霊験寺院としての伝統を積み重ねていた長谷寺がその霊験性を増強する動きをみせたとしても不思議ではない。その霊験の一つが長谷寺も異国と関わるという本尊の異国霊験であったのであろう。『三宝絵』『源氏物語』などにおいて、異国にもその霊験が評判になっているという記述がなされた時期的背景として踏まえておきたい。

長谷観音に関する時期的にもっとも確実な縁起である『三宝絵』によると、観音は霊木で製作された

ものではあるが、それは近江国のもので異国の木ではない。すなわち、三如来のように三国伝来ではないのである。異国で霊験を示すためには三国伝来仏の方が都合が良いように思えるが、そのことはさしたる問題ではないようである。しかしながら、長谷寺創建に関わった道明は唐僧であるといったような異国伝承もみられるところから（『東大寺要録』巻六末寺章九）、長谷寺には何らかの異国性が関わっていることが主張されてもいたらしい。

その点で留意したいのは、長谷観音像の制作者とされる稽文会・稽主勲なる伝説的仏師についてである。これらの仏師たちについて詳論する余裕は無いが、大江篤氏の研究によると稽文会・稽主勲らは平安期の仏師にとって記憶に留めておくべき霊像を造った仏師と認識されていたこと、造仏伝承は十二世紀に藤原氏の氏神春日神の化身である仏師による造像という伝承として長谷寺の勧進活動の一環として生成された、とする(28)。

彼らの造像伝承を語る確実な史料は、永承七年（一〇五二）の焼失に関連する『春記』永承七年九月七日条の「或説云…養老五年長谷寺僧道明等建立、大仏師警文会云云」という記述である。すなわち、十一世紀半ば以前には長谷観音は稽文会らにより制作された、という伝承が語られていたことになる。

稽文会・稽主勲という名はいかにも異国を思わせる名である。大江氏は彼らの実在性については明言されていない。岩佐光晴氏は一歩踏み込み、彼らの実態は不明ながらも『長谷寺縁起文』に見える聖武天皇の時期に根本像の造立が行われた際に中国からやってきた実在の仏師で、造立後ほどなくして中国にもどったもの、と推測している(29)。

稽文会・稽主勲らが平安期の仏師に記憶されるべき仏師であったとしても、彼らが異国人であるとい

う認識がなされていたかどうか確認し難い。しかしながら、そのことが自明の前提であったとすれば、彼らによる造仏伝承が語られ始める時期を鑑みるなら、長谷観音の霊験性に異国性が付与される一因として稽文会・稽主勲造仏伝承は考慮すべきと思われる。

長谷寺創建に際して道明、稽文会・稽主勲らの異国人が関わっていたことが事実であったとして、彼らにより導入された異国に関する知識などがその後長谷寺で管理され続け、必要に応じて宣伝などに使用され形ある話として形成・成長していった、と考えることはあながち不可能ではあるまい。寺は大陸文化を集積し発信していく一種の文化センター的機能を有していた、という一般論からもうなずけよう。ただ、そうであるなら、長谷寺が大陸文化の中継的役割を果たしていた側面を、多少なりとも述べておく必要があろう。直接的な説明は困難であるが、次節で少々述べておきたい。

（二）異国霊験譚の導入

異国霊験譚の要素は創建以来長谷寺に蓄積されていた話であった可能性について前節で示唆した。しかしながら、そのことは可能性として皆無とはいえないまでも説得性には欠けるであろう。やはり、十世紀末から十二世紀初頭にかけての動向の中で考えておくべきことであろう。それも本寺として支配力を強めていく興福寺及び藤原氏との関係における間接的説明とならざるを得ないことを了承されたい。

ここで注目したいのが、大江定基こと寂照（？～一〇三四）とその弟子念救の動向である。寂照については改めて多言は要しないであろうが、長保五年（一〇〇三）に入宋し、帰国することなく宋で客死した。寂照は在宋中しばしば書簡で中国の情報を日本に伝え、寂照とともに入宋した弟子念救は長和二

年（一〇一三）に天台山勧進のため一時期帰国し、長和四年ころ再び入宋した。特に念救は、再度の入宋に際して藤原道長から寂照宛の金品を託されたり[30]、勧進に際して中国事情を熱心に伝え歩いたらしい[31]。つまり、寂照・念救らにより十一世紀初頭において藤原道長を初めとする有力貴族らに多くの中国の情報がもたらされていたのである。

さらに、この時期道長・頼通及びその関係者らがしばしば長谷寺に参詣していることを鑑みるなら[32]、彼らにより長谷寺に寂照・念救などから得た中国の事情などがもたらされた可能性は否定できない。こうした藤原氏の動向はその氏寺である興福寺・興福寺僧らにも影響を与えたであろう。寂照は興福寺僧清範（九六二～九九九）などと交流もあり、東大寺から長谷寺を横取りしたとされる平伝以降の長谷寺別当は興福寺僧であった。その別当の一人に清範の弟子である真範（九八六または九八七～一〇五四）がいた[33]。

寂照・念救らによりもたらされた中国事情の具体的中身が知られないことが大きな課題である。ただ、よく知られた話ではあるが『今昔』の寂照をめぐる説話に幾分のヒントは求められそうである。一つは寂照と交流があった清範が死後宋帝の皇子に転生するが、渡宋した寂照がその皇子と会い霊験を示され清範が文殊の化身であることを認識する、という話である（巻十七―三十八）。中国に対して清範の霊験性を説いた話と受け取れよう。

もう一話が巻十九―二の出家譚で、寂照をめぐる多彩な説話のうちの主要部分により構成されている。中でも渡宋後の話として、皇帝から飛鉢の行法を求められた寂照が「本国ノ三宝」に祈ることによりその難を切り抜けた話は、後述のように『験記』上巻第一話で吉備真備が行った行為と同質のものといえ、

その点で共通性がある。さらに、中国における寂照の話を真実性をもたせるためか、弟子念救により伝えられたことが話の末尾に明記されていることも注目される。「本国ノ三宝」という部分に注目するなら、三宝（ここでは仏菩薩）に「本国」という地名が冠せられてはいるが、特定の寺が指定されてはいない。この話は事実ではないにしても、寂照の生存時期からするなら長谷観音の異国霊験が主張され始めた時期と重なる。しかし、長谷観音が登場していないところに、その霊験譚が当時においてはまだ一般には広まっていなかったことがこの話には反映していたとも考えられる。

この二つの例に共通することは日本の仏菩薩（あるいは化身）が中国で霊験を示したということで、それは中国に対しての対抗意識・優越意識が寂照に体現されて語られたということでもあろう(34)。寂照・念救らが宋において日本の仏菩薩の利益を説いていたのかどうか史実としては確認しがたいが、彼らにそうした役割が求められていたことを『今昔』の話は反映している、と考えられよう。寂照・念救らによりもたらされた中国事情の中にこうした日本の仏菩薩の異国における霊験に関わることも含まれていたのでは、と思われるのである。長谷観音異国霊験が語られる直接的な背景とはいえないにしても、踏まえておいて良いことと思われる。

とはいえ、この時期における肝心の長谷寺関係僧侶の動向が今一つ明確ではないため、以上述べたことも隔靴掻痒の感は否めず説得性に欠けるという批判は予想される。しかしながら、長谷寺周辺における十一世紀初頭の異国に関わる動向として以上のことに留意し、異国霊験譚導入の直接的契機と捉えておきたい。もう少し端的に言うなら、十一世紀において長谷寺は異国の情報を得ることができる環境に置かれていた、ということである。

三、異国霊験譚の特質と意義

前提的な説明に少々紙数を費やしたが、ここで本来の目的である長谷観音異国霊験譚について触れたい。

（一）長谷観音異国霊験譚

前述のように『験記』に収録された異国霊験譚は五話である。それに先立ち、『験記』の序文には、長谷観音の霊験は計り知れないが「本朝異域ニ此寺ヲ移シ、此尊ヲ顕シ奉ル事処々ニ満リ」と、異国にも長谷寺が建立されその霊威が及んでいたことが述べられる。

五話は全て上巻に収められているが、次にその概要等を示す。

a、一つ目は「吉備ノ大臣於大唐読野馬台詩ヲ帰朝事」と題された、入唐した吉備真備（六九三～七七五）にまつわる話である（上巻第一話）。時は元正天皇の世（七一五～七二四）。真備はその才能を唐の人々に妬まれ、四つの試練を課せられる。その試練のうち①楼閣に閉じ込め死を待つ、②『文選』を正確に読む、③囲碁の勝負、の三つまでは真備自身の術と鬼神となった阿倍仲麻呂の計らいにより解決する。しかし、暗号のような書き方をした宝志和尚作成の野馬台詩を読むという四つ目の試練は鬼神ともどもお手上げとなる。そこで、入唐していた元興寺の僧代智の勧めにより長谷観音に祈ることとした。真備が祈願すると長谷観音が蜘蛛となって現れ、蜘蛛が描く糸のとおりたどると読む事が出来た、

という話である。真備が詩を読む様子を姿を隠して後ろで見ていた鬼神が、持参した数珠の環の間から蜘蛛を見ると「十一面観音臍ヨリ光りヲ放、其光蛛ノ糸」となって文字の読み方を示した、とある。蜘蛛が長谷観音の使いか長谷観音自身なのかどうか微妙ではある。しかし、ここでは、長谷観音が直接現れることにより、四つ目の試練を解決し得たと解釈しておきたい。

真備が神仏の力に依拠する場面は、

吉備日本ニ向テ重テ心中ニ祈念シテ云、我朝六十余州ノ仏菩薩、大小神祇、別ハ国主天照大神住吉八幡、殊ハ今顕ハレ御長谷寺ノ観自在尊、願ハ利生新ニ施玉ヘト祈申ス（傍線は筆者）。

となっており、日本における複数の神仏が列挙されているが、利益を及ぼしたのは長谷観音なのである。先行説話は『江談抄』巻三の一である。

b、二つ目は、「唐朝ノ馬頭夫人得端正成守護神事」と題された話である（上巻第六話）。時は陽成天皇（八七六～八八四）の世。唐の僖宗皇帝の第四后馬頭夫人が馬の顔のような容貌を治療しようとする。医者が素神仙人を紹介するが素神は仙術では治せないので仏神に祈るべきことを言い、長谷観音を紹介する。夫人は道場を設け祈願したところ、夢でも現でもない状態の中、東方から霊妙不可思議な様子の僧が現れ、瓶水を顔に注いだところ美人になりますます皇帝の寵愛を受ける。

后はお礼として唐の乾符三年（八七六）に長谷寺に種々の宝物を送り、長谷寺の護法善神となることを誓願する。宝物は無事到着し長谷寺に送られた。しかし、馬頭夫人の意図などは知られることはなかったが、元慶五年（八八一）に長谷寺に参籠した土師時躬の子に馬頭夫人が憑依し事情が語られ、以後馬頭夫人の霊を護法善神として勧請しその善神の霊威が示されることになった、という話である。この

話の先行説話は確認されていないが、前述したように池上氏の考察がある[35]。

c、三つ目は「唐大梁大祖取国位建立今長谷寺事」と題された話である（上巻第九話）。時は醍醐天皇の御世（八九七～九三〇）。唐では荘宗皇帝と大祖皇帝が天子の位を争っていた。大祖皇帝の形勢が不利になったため仏神に頼ることになり、日本の長谷観音が一際霊験あらたかということで祈願することになる。すると、東方から王冠が飛来し大祖の頭の上に乗る夢を見て勝利を収める。皇帝はその後大唐宋州岩山に小観音像を模写し新長谷寺を建立した、という話である。最後は唐の人々が常に尋ねている日本の仏菩薩は、長谷寺の他は東大寺大仏と金剛山である、と結ばれる。本話において長谷寺観音の示現の有無は曖昧である。また、異国に新長谷寺が建立されたこと、さらに唐代の人々から東大寺大仏や金峰山が崇拝されていたことが語られている点などが注目される。

d、四つ目は「新羅国ノ照明王ノ后遁王難ヲ送宝物事」と題された話である（上巻第十二話）。時は村上天皇の御世（九四六～九六七）。新羅の照明王の美貌の后に横恋慕した近臣義顕は、王が戦に出掛けている間に后と関係を持つ。怒った王は后の髪を木に縛り吊るすという折檻をする。その苦痛から逃れるため后は僧の勧めで長谷観音に祈願する。すると童子が現れ、折檻に苦しむ后を介抱する。やがて王は過ちを認め后を許し、天暦六年（九五二）長谷寺に三十三の宝物を送った、という話である。舞台が朝鮮という珍しい話で、先行説話は前述のごとく『今昔』巻十六第十九話である。

e、五つ目が「唐ノ堯恵禅師ガ依冥ノ告来当寺往生事」と題された話である（上巻第十三話）。時は花山院の御世（九八四～九八六）。極楽往生を願っていた唐の天台山の僧堯恵は、天台山の如意輪観音（極楽浄土の脇士）の御前で大願を起こす。百日が満ちる暁に一人の童子が現れ、長谷観音の霊場を示す。

堯恵は来日し童子が示した霊場は長谷寺であることを認識し、そこで苦行を行い往生した、という話である。先行説話は確認されていない。

（二）異国霊験譚の意義

以上の五話からうかがえる長谷観音の異国霊験譚の特徴的なことや意義などについて考えてみたい。話の番号は前節で付したアルファベットで示す。

第一は、話の時代は長谷寺創建期である八世紀から十世紀末に及んでいることである。前章で異国霊験譚の出所の一つとして異国の僧や仏師による創建ということが関わっていたらしいことを可能性の一つとして指摘した。その可能性があるとするなら、話に登場する固有名詞などからして創建期と時代を同じくするａのみが時期的に該当する。他はそれ以降に付加されていった話、ということになろう。

第二は、ｂ・ｄに見られる利益を被ったお礼に異国からではあるが長谷寺に宝物を送った、という話である。ｂでは「仏具一式、錫杖、鐃鉢、金剛鈴、玉幡、牛玉、法螺、虎皮、孔雀尾、如意」（個々の内訳などの記載は省略）であり、ｄでは観音の三十三身に因んで三十三の宝物が列挙されている。その一々は煩瑣になるためここでは記さないが、ｂで示されたものと重なる物も多く全体としてｂをほぼ三倍した詳細なもの、と見て大過はない。これらは寺の什物を構成する物ともいえるので、特にｄで示されたものは、時期的に見て天慶四年（九四四）の焼失後の再建に際して揃えられた什物の一部を示している、とみることも可能であろう。

第三は、霊験を示す際の長谷観音の現れ方に関してである。ａは既述のごとく微妙な所もあるが、真

備の神仏への祈りの言葉として引用した文の傍線部「今顕ハレ」という表現に観音が蜘蛛として現れたと解釈し得る余地がある、としておきたい。bは東方から現れた僧が観音の化身ということになろう。cは東方から王冠が飛来したことが観音の計らいによるものであることを示しているが、観音が使者を遣わした様子はなく、化身としても直接現れてはいない。観音は長谷寺に鎮座したままでその法験を異国に及ぼした、という型の話といえよう。ここで注目したいのは新長谷寺が中国に建立されたことである。異国にも勧請されたことを主張した例である。cは長谷観音が直接にも間接にも現れなかったが、そのことは勧請の必要性を説得的に主張することにあったとも考えられる。dでは折檻されていた后の苦痛を緩和したのは童子であった。『験記』登場の童子は、観音の化身や使者として様々な働きをする(36)。童子が長谷観音の化身か使者かの判断は難しいが、この場合は観音の使者と解釈しておきたい。

eに現れた童子も使者と思われる。その理由は童子の役割は直接堯恵を往生させるのではなく、長谷観音の霊場を示すことにあった。堯恵は長谷観音の利益を直接得るために来日し、そこで苦行を重ね往生しているのである。堯恵が当初往生を願った天台山の如意輪観音はその願いを果たすことが出来なかったことも注目される。長谷観音の霊験を強調することが目的であったにしても、同じ観音でも能力差が設定されていることに興味を惹かれる。

eの話は長谷観音は他の菩薩よりも霊験が優れていることが強調されている。『験記』においては菩薩同士の優劣のみならず、如来にも適用されていることが知られる。前述のように上巻第十話は、『験記』成立以前の五回にわたる長谷寺焼失と観音の霊験を語った話であった。そこでは、第一回の天慶七年の火災の時に、長谷観音が広隆寺の薬師如来に対し他方世界にしばらく移るのでその間衆生救済を依頼し

ている夢を、広隆寺僧が見たことが記されている。菩薩が如来に命令しているわけではないが、菩薩が如来に依頼ごとなどできるものなのかどうかについて考えさせられ、興味が惹かれる。少なくともここでは如来と菩薩は対等的である。

また、下巻第一話は、善光寺如来が翁の所願を叶えるため長谷観音の霊地を示したこと、久修園院（木津寺）の釈迦像は長谷観音の制作であることが語られている。前者は善光寺如来が自ら翁の願いを叶えることができなかったためか、代わりに長谷観音を紹介した型になっている。観音の霊験が如来のそれを上回っていることを示しているようにも受け取れる。また、後者は悟りの度合いが一段低い菩薩によって造られた如来像ではあっても、長谷観音であるが故にその如来像の功徳は劣るものではないことが語られていると考えられる。以上の点で、長谷観音の抜きん出た霊力が強調されているのである。

（三）形而下的地域神の特質

以上、長谷観音の異国霊験譚をめぐる諸問題について論じてきた。ここで当初の目的に戻り形而下的地域神とされる日本の仏菩薩の特質等について、それより一段低い存在とされる日本の神々の特質を踏まえながら整理しておきたい。

第一は、日本の神々は異国には神威を及ぼすことは出来なかったが、日本の仏菩薩はそれが可能であった。それは寺側の一方的主張でもあるので、実際に異国で受容されるかどうかは別問題であったはずである。そうであるなら、多くの寺院で異国霊験が主張されてもよかったはずである。しかしながら、現在のところそうした主張は長谷寺の例しか見られないところに、長谷寺の固有性があったといえよう。

本稿で述べた一般論的な理由のほかに掘り下げて検討しなければならない課題はまだ残されているといえよう。

「〜寺観音、〜寺釈迦」といったように特定寺院名（地域）が付された仏菩薩たちは、地域を越えて縦横にその霊験を及ぼすことが可能であったといえよう。それは垂迹仏ではあっても仏菩薩の持つ普遍性を継承していたからといえる。

第二は、日本の仏菩薩は寺に鎮座したままで時空を越えて縦横にその霊験を及ぼせ得たとはいっても、一定の制約を有していたようである。それが「新・近〜寺」が日本各地及び異国に建立されていることである。それは教線拡大のために取られた処置であったといえる。ただ、長谷寺を初めとして「新・近〜寺」の典型である清水寺や善光寺などはそれぞれ法相宗、天台・浄土宗ではあるが、もともと宗派性は大きな問題ではなかった。教団勢力拡張という目的がなかったわけではないが、それが主たる目的ではなかったといえる。「新・近〜寺」の建立は既述のように、身近に霊験ある仏菩薩を呼び寄せその利益を被るという神社の勧請と同質の行為である。神々の場合は神威を及ぼせる範囲が限定されていたので利益を被りたい場合は直接鎮座している場に赴くか、勧請という方法がとられたのであった。しかしながら、普遍性を持った仏菩薩の場合、理屈上はそうする必要性はなかったはずである。にもかかわらず「新・近〜寺」などが建立されたのは、日本の仏菩薩は地域を越えて霊験を及ぼせるとはいっても一定の限界があったので、その限界を克服するためにとられた行為、といえるのである。いわゆる形而上的仏菩薩の持つ普遍的能力が希薄になった垂迹仏に対して取られた行為、ともいえるのではないかと思われる。

本来普遍的であるべき仏菩薩は地域（特定寺院名）が冠せられることにより、地域性や日本という民族性が付与されることになり日本の神々と類似の性格を帯びるようになった。その結果、国内はまだしも異国において仏威は無条件には通用しにくくなったと考えられたのではないかと思われる。

第三は、異国霊験とは直接関係しないが、普遍性の希薄化ということに関して補足しておきたいことである。形而下的仏菩薩は本地垂迹説における本地仏にはなり得ない、ということである。長谷観音に即するならば、長谷観音は天照大神との同体説は主張されるが[37]、特定の神の本地仏にはなってはいない。初瀬地域の地主神である瀧蔵権現とは習合を深めはするが、長谷観音と瀧蔵権現とは本迹関係にはなっていない。形而下的仏菩薩は形而上的仏菩薩の垂迹仏とも言うべき存在になっているので、その点で本来有していた普遍性が希薄化しているといえるのである。したがって、特定の神の本地仏足り得なかったのでは、と推測しておきたい。

おわりに

覚書程度のものにしかならなかったが、神々の機能をめぐる課題の延長として形而下的仏菩薩の機能の問題を異国霊験譚に限定して考えてみた。長谷寺に入宋あるいは来朝僧がどの程度関与していたのかは、異国霊験を主張することになる直接契機であると思われるので検討すべき今後の課題であろう。それは特に十～十一世紀の長谷寺に関わった僧侶の動向の分析の中で明らかにされるべき課題と思われる。それは長谷寺をめぐる宗教的環境の検討ということでもあろう。

また、日本において仏菩薩信仰はなぜ特定寺院に張り付き地域神化した形で展開したのか。また、それは日本のみの現象なのか、という根本的ともいえる課題についても解明する必要があろう。日本において神仏習合の歴史は仏主神従の形で展開すると考えられているため、神が仏教から被った影響に関心が集中し、仏教側が受けた影響などにはあまり関心が示されていない嫌いがある。

神が常住する社殿の発生と仏像安置の伽藍建立の時期は、社殿発生時期が確定されていないため断定できないが、社殿の方が少なくとも一世紀ほどは先行するものと思われる。社殿に祀られた神が一定の祭祀圏を有していたように、伽藍に安置された仏菩薩は必然的に伽藍を取り巻く一定領域の地域神と化していったとも考えられる。社殿と伽藍は相互に影響を及ぼしたのであろうが、仏菩薩の地域神化という特質は神祇信仰の影響によるといえるのかもしれない。そして、そのことを最も早く確認できる寺の一つが長谷寺であるといえよう。

神仏習合を日本固有の宗教現象と捉えがちな傾向を戒める見解が近年出されており、神仏習合史の見直しが迫られている(38)。そのことは重要な指摘と思われるが、神仏習合の現象が中国にも見られそれが日本に導入されたとしても両国においてはやはり違いもあると思われるので、日本の固有性の検討は必要であろう。神仏習合研究を実りあるものにするため本稿で述べたことを今後も深化させていきたい。

（おいしお　ちひろ・北海学園大学大学院教授）

［註］

（1）柴田実「神と仏」（初出は一九五六年、同『日本庶民信仰史』仏教編所収、一九八四年、法蔵館）。

（2）佐藤弘夫『アマテラスの変貌』九十五・九十八頁（二〇〇〇年、法蔵館）。但し佐藤氏は柴田氏の見解には触れていない。

（3）拙著『中世説話の宗教世界』第二編所収の諸論考参照（二〇一三年、和泉書院）。

（4）本文は永井義憲解説『長谷寺験記〈新典社善本叢書二〉』（一九七八年、新典社）使用。本書には現行最古の写本である鎌倉末期古写本と天正十五年（一五八七）古写本の二本の影印が収められている。永井氏によると『験記』の成立は正治二年（一二〇〇）から承元二年（一二〇九）の間に限定され、撰者は長谷寺関係の勧進聖とされる。『験記』の成立・撰者に関しては永井説に従っておく。

（5）野口博久「『長谷寺験記』と『流記』」（西尾光一教授定年記念論集刊行会編『論纂　説話と説話文学』所収、一九七九年、笠間書院）、同「長谷寺験記」（本田義憲他編『説話の講座』四所収、一九九二年、勉誠社）。野口氏は長谷寺の強い海外志向は『験記』を特徴付ける大きな要素の一つとし（本注第二論考）、小峯和明氏も長谷観音はもともと国際的な面が色濃いともされるが（同『中世日本の予言書―〈未来記〉を読む―』九十四頁〈二〇〇七年、岩波新書〉）、なぜそうなのかの説明は両氏ともされてはいない。

（6）池上洵一「長谷寺対外霊験譚の構造―長谷寺唐朝馬頭夫人説話と勝尾寺百済国王后説話―」（初出は二〇〇六年）、同「勝尾寺百済国王后説話の構造と伝流―対外霊験譚研究の一環として―」（初出は二〇〇七年、いずれも同『説話とその周辺〈池上洵一著作集第四巻〉』所収、二〇〇八年、和泉書院）。なお、池上氏はこれより以前に「唐土にだに聞こえあなり―長谷寺の霊験―」（『むらさき』三十八、二〇〇一年十二月）なる論考があるが、それは本注の第一論文の中に組み込まれている。

（7）この中に収められた上島享「中世長谷寺史の再構築」は歴史学の立場からの長谷寺研究の現在の到達点を示す。同稿は「中世神話の創造―長谷寺縁起と南都世界―」と改題・改稿され、同『日本中世社会の形成と王権』に収録（二〇一〇年、名古屋大学出版会）。

（8）下巻第三話で既に長谷寺と十一面観音の功徳が語られている。

（9）『沙石集』では巻二などで仏菩薩一般の功徳が語られはするが、実際には釈迦（嵯峨清涼寺）、阿弥陀（善光寺）、薬師（横倉寺、熱田神宮寺）、観音（粉河寺、長谷寺、清水寺）など特定寺院の本尊の功徳として語られる。
（10）『続日本紀』神護景雲二年（七六八）十二月二十日条。
（11）『続日本後紀』承和十四年十二月二十一日条。壺坂寺とともに霊験寺院とされていたことは『日本三代実録』仁和元年（八八五）十月三日条でも知られる。
（12）『日本三代実録』貞観十八年五月二十八日条。
（13）同右、貞観八年三月五日条。香山・壺坂寺とともに金剛般若経の転読がなされている。その理由は明記されていないが、この年一月二十三日に災疫防止のため五畿七道諸国・太宰府に七日間の潔斎と金剛般若経の転読が命ぜられていることと関係するのかもしれない（『日本三代実録』）。
（14）同右、元慶四年（八八〇）十二月三日条。
（15）この間長暦二年（一〇三八）にも火災があったことが知られるが、被害は塔と僧坊の焼失で、小規模かつ本尊は無事であったためか（『百錬抄』同年三月十七日条）、焼失回数には入れられていない。
（16）上島享注（7）の論考。
（17）野口注（5）の論考。
（18）上島享注（7）の論考。
（19）本調査は、石田茂作「長谷寺の沿革と其の文化財」（『大和文化研究』五―二、一九六〇年二月）に付されたものである。
（20）福原僚子「遊行する仏たち―長谷寺観音信仰の地方展開―」（『大和長谷寺・全国長谷観音信仰』所収）。
（21）八田達男「長谷寺十一面観音の像容」（初出は一九九六年）。
（22）同「伊勢 近長谷寺と長谷寺観音信仰」（初出は二〇〇〇年）。注（21）の論考とともに同『霊験寺院と神仏習合―古代寺院の中世的展開―』所収（二〇〇三年、岩田書院）。
（23）永島福太郎『豊山前史』二十六頁（一九六三年、長谷寺）。逵日出典『長谷寺史の研究』第一編第七章（一九七九年、巌南堂）。

(24) 上島享注（7）の論考。
(25) この辺の事情は塚本善隆「嵯峨清涼寺史 平安朝編」参照（初出は一九五五年、同著作集第七巻『浄土宗史・美術編』所収、一九七五年、大東出版社）。
(26)『吾妻鏡』における善光寺の初見は文治二年（一一八六）三月十二日条。
(27) 中野玄三「因幡堂縁起と因幡薬師」（東京国立博物館『学叢』五、一九八三年三月）。同稿には東京国立博物館蔵因幡堂縁起（鎌倉末までに成立）と文章がより整った東寺観智院本因幡堂縁起（原型は一四二六年成立）が対比・翻刻されている。
(28) 大江篤「〈春日神〉造仏伝承の成立―〈稽文会・稽主勲〉造仏伝承の再生をめぐって―」（『御影史学論集』二十四、一九九九年十月）。
(29) 岩佐光晴「仏師稽文会・稽主勲をめぐって」（村重寧先生・星山晋也先生古稀記念論文集編集委員会編『日本美術史の杜』所収、二〇〇八年、竹林舎）。
(30)『御堂関白記』長和二年（一〇一三）九月十四日、同四年七月十五日条など。
(31)『小右記』長和二年九月二十四日条には「入唐僧念救来、終日談説唐事」とある。
(32) 長和元年（一〇一二）三月十四日には頼通、寛仁元年（一〇一七）には頼通の北の方隆姫と頼通の子教通らが長谷寺参詣（以上『小右記』十月六日・二十三日条）。万寿元年（一〇二四）には道長が長谷寺に七日間参籠している（『小右記』同年十一月十六日・二十六日条）。
(33) 清範及び真範については拙稿「清範をめぐる諸問題」（初出は二〇〇〇年）、「真範について」（初出は一九九九年）も参照。ともに拙著『中世南都の僧侶と寺院』所収（二〇〇六年、吉川弘文館）。
(34) 森正人「対中華意識の説話―寂照・大江定基の場合―」（『伝承文学研究』二十五、一九八一年四月）。
(35) 池上洵一注（6）の論考。
(36) この点に関しては横田隆志「童子」（前述「中世長谷寺キーワード小辞典」所収）を参照されたい。
(37) 横田隆志「伊勢」（「中世長谷寺キーワード小辞典」所収）。伊藤聡『中世天照大神信仰の研究』第二部第一章参照（二〇一一年、法蔵館）。天照大神の本地仏は十一面観音とはされるが、特定の地域が冠せられた十一面観音であ

る長谷観音とはされていない。

(38) 吉田一彦「神仏習合―東アジアの中の日本神仏習合―」(初出は一九九六年、「東アジアの中の神仏習合」と改題し、同『古代仏教をよみなおす』収録、二〇〇六年、吉川弘文館)。